

膽液黒敗病彙説

洋学文庫  
文庫8  
C 185





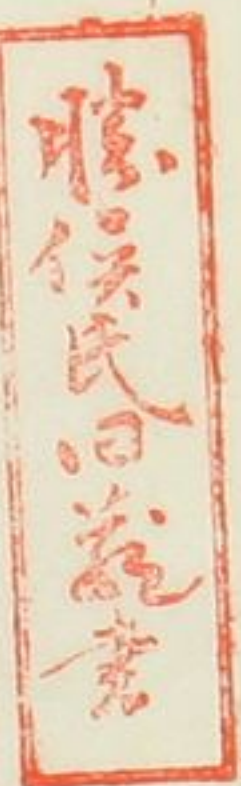
書膽液黑敗病彙說首

今茲八月江戶奇疾流行其為症劇者立斃緩者二三日醫家  
診以為霍亂而其方多无功焉唯其知西洋醫法者不以為霍  
亂曰是疾也距今三十七年始行于歐洲事見紐達遂及我

畿內名曰古列古列亞又作古列刺荷蘭翻曰胆液病又吐  
稱此病曰東印度吐浮病又曰亞細亞其療之亦異其術往往  
有驗云是月岩陰塩谷先生見示宇田川氏譯述古列亞說及

自著病源等予素不知摸漢家所唱陰陽五行之理况洋醫學  
科實驗魚備之說子雖然隔鞞論之則漢之与洋治亡之相反  
在於其施治之慣不慣耶将由子法術之精与不精也於是考

古昔痘瘡西來之時其死亡之多猶古列亞療法未精之今日  
欲若使漢家有所就此書以究治子則病夫之有免死者何与  
今日之痘瘡異於是急写一本附以官頒普救藥方及民間所



傳預謀治法等。示請友人柳河春三。春三亦著暴發吐瀉病療  
方集考贈其稿。本於余時疫禍漸熄。遂合前卷為一冊。以藏之。  
子家卷首所載緣起一篇。亦春三之所贈也。安政戊午仲冬川  
口鬮撰

左編跋太亞斯<sup>ボウヤス</sup>勃爾<sup>ボウ</sup>著。江戸宇田川榕菴譯古列亞沒  
爾菴斯說。序ニシテ塩谷ノ書古列亞說後一編亦之レ  
ニ附スルモ。ナリ病原論亦塩谷ノ著シテ安政五年塩  
谷ノ宇田川ノ古列亞沒爾菴斯ニ之レヲ記シテ同好ノ  
士ニ分テルモ。ナリ

古列亞沒爾菴斯說緣起

壬午初冬得大坂齋藤方策書曰。今茲八月山陰山陽二道厲  
氣流行。至九月益盛。罩及畿内。或齒戶傳染。甚至滅門。其症与  
尋常疫癘迥別。其初起忽然腹痛如割。已而嘔吐下利。齋起湯  
藥不下。咽絕脉轉。筋四肢厥冷。眼面陷凹。直視天吊。惡候百出。  
重者三時許而斃。輕者亦不出三日。醫家見解不到。疑怪乱内。  
妄投錯施。更加失治。其死者雖以大坂繁庶。道一月許之率不  
下數千人。棺擲相望。傷哭載路。定可謂生民之劫。數其漸傳

及奧羽亦未可知也子其宜早為之所余讀了愕然記今春和  
蘭入貢余時在江戶從桂嶋桂川先生暨盤水大槻先生訪其  
使臣酋長貌魯莫火弗暨醫人舌兒令倨於其客館得數診醫  
事貌魯莫火弗曰方紀元一千八百廿年我政瓜哇島跋太  
肝血之地古列亞波爾爸斯此細胆流行翌歲殊甚死亡不可  
勝計也國醫勃微兒者解剖病屍明其病源以定治法由是全  
活者甚衆遂錄其法以其歲之四月聞之官廳官取閱彫告本  
工暨所置之各國諸商館實其歲五月也乃出印本一葉依觀  
西洋諸州之俗凡有一異事必告諸官廳官隨錄以刊行使國  
國速知焉名曰格烏蘭杜酋長所示印本即是  
其所記証候与方策所云全同乃知夫天地间一種厉氣漸延  
而及我邦也裁書質之二先生皆曰同一病各賜考案併見示  
友人宇田川榕庵沮液病說一篇即就酋長原本而所記云迹  
又接榛齋宇田川先生賜昏頗悉其說泰互沉研治法始得就

緒庶子免者安投錯施之失也爰摘其要刊告同志世之厚志  
於清物者悅有取于斯矣夫文政五年龍集壬午冬十一月仙  
臺醫學勸督蘭科事佐々木中澤知芳識

書古列亞說後

當鄂英構兵之乙卯年。噶蘭有年報云。瓜哇及近島。風雨不順。古列亞流行。歐洲地方。鄂英所營水潦疊至。士卒困墊。亦中是疾。死亡甚多。予問蘭醫氏。古列亞當年邦何病。醫云。症如霍亂而尤劇。我邦未曾有。當時未暇問其治法而止。今茲戊午八月。江戶異疾流行。其始膈下痞懣。手足厥冷。或浮。或吐。顏面陷凹。肌發紫斑。其終角弓反張。煩悶以絕。緩者一二日急。乃不保霎時。藥之以霍亂方。而無效。衆醫束手。嗒然瞪目。予竊念。或無乃古列亞疾乎。近年洋夷魚然入港。入都。連書橫行。腥風薰灼。惡臭撲人。今復伏陰。盲雨驟降。淒風時至。節過處暑。熱乃如三伏。陰陽錯逆。顛倒人身性。於是予異疾乘異候以入焉。亦猶竺衲東來。痘瘡隨行歟。雖然。洞天人之理。以察病源。精百藥之性。以施治劑。則豈不可救哉。偶獲宇田川榕葦所訊西洋方書。余

素贍於醫術。未詳其言之當否。然其說症與今所聞往々吻合。其設劑亦似有理。聰明之士。資焉以助神智。則蓋有思過半者矣。因急寫數本。贈諸所識醫師。為漢學者。且噶之謂。此各宜以公明之心觀之。夫漢家之與西洋氏。相覽久矣。設令其相和。國隔東西。風土殊候。性體異養。其配方。須增損取舍者。固也。非至公無以合同異。非至明不能以辨毫釐。至公至明。仁之術於此。予存矣。是為跋。

安政五年戊午仲殊旬二日

岩陰塩谷世弘書

今度流行ノ病西洋ニ所謂古列亞没尔瓮斯ニ相違ナシト  
思ハル其證據ハ古列亞說ニイフ所ノ病症ト今行ハル、  
病症ト考テ見ルベシ但シ其病源ハ古列亞說ニモ未見  
按スルニ風雨ノ不順水潦ノ汚濁湿氣ニアタルヨリ来ル  
ナルヘシ乙卯年葡人風說書ニ云呱哇其外領地當年季候  
不直コレヲ名病麻疹一圓流行仕候又同書魯西亞ノ一ヲ拳  
タル條ニ云魯西亞及英佛軍勢打續キ晝夜トモ暴風或ハ  
湿リタル地上ニ於テ雨水ノ流ノ中ニ次リ又数手ノモノ  
ハ大ナル天災發出致シ候テコレヲ名病或ハ他病ノ為ニ死  
モイタル候風說書人是ヲ以テ本朝當年ノ氣候ニ此考  
スルニ春以来氣候不順四月多雨五月霖雨中却テ雨少ク  
六月小暑節以後暑氣ウスク驟雨繁々ニ来リ或ハ朝ニア  
リ或ハ日中ニアリ或ハ夜ニ於テス立秋節ニ入テモ同シ

氣候ニテ残暑モツヨカラス井水濁リ餘潦床下ニ入り湿  
氣殊ニ深シ然ルニ七月十六日以後驟ニ晴炎暑酷烈ナル  
ト王旺中ニ十倍スリ当月十五日ヨ是ニ依テ下人ハ戸モ不  
閉或ハ醉後ニ露卧スル者モアリ因テ雨湿ノ汚穢鬱蒸ノ  
氣ニテ古今未曾有ノ病ヲ醸シ成セリ八月十三日友人安  
井仲平余ニ与ル唇ニ云尾臺良作相見種々致相談候処胃  
腸煩悶致候杯免角流行病前兆ニ有其節葛根加半夏湯相  
用登汗致シ平常ニ復シ候者モ御座候由是ハ至極ノ理ニ  
御座候秋元藩門番ハ吐劑ニテ全快致シ候者モ有之由八  
下堀肴屋ノ妻ハ衆医免テモ療治不相叶ト申切候節懇意  
ニヒヤウキニ者有之免テモ死候ハ万一ノタメニ血  
ヲ取ヘシトテ劊刀ニテ満身ヨリ血ヲ出シ候処忽チ致快  
氣候由今日承候此度ノ病氣ハ六七月中雨湿ノ毒ヲ受ル

上ニ残炎燬存テ水火ノ戦ト相成酷烈ノ毒ヲ生シ右毒筋  
絡ヲ閉候ユハ血脉速ニ絶手足厥冷ノ外症ヲ形シ候血ハ  
心臓ヨリ發シ五体ヲ偏リ廻リ又心臓下部ニ歸候モノ候  
心四肢運行ノ路塞リ臟腑ニ壓迫イタシ候ヨリ右ノ毒氣  
ト相和シ火ニ火ヲ加ル如ク毒氣益甚シク臟腑ヲ攻候ユ  
ハ忽斃ニ相違無之下存候山ノ手ヨリ下町多ク下町ニテ  
モ佃島ヨリ行徳船橋上総ノ五井迄十五六里ノ間ノ獵師  
ハ人種尽候程ニ死亡諸屋敷ニテモ身分有之者ヨリ下部  
多ク候ハ全ク雨湿ノ氣ヲ沃山受居候試ト存候依之未病  
以前ノ養生肝心欲ト存候免角湿熱ノ氣ヲ拂置候ハハ舟  
承ノ硫黄ヲ去道理ニテ火毒參候テモ火不移道理ニ候又  
出血イタシ候ハハ臟腑ノ熱血自然薄ク相成候間病勢減  
候ト尤ノトニ候漢医モ國手ハ良法有之哉不存候ハ凡

手ハ手足厥冷ノ外症ヲ見テ是非附子理中湯坏与候ユハ  
益其命ヲ縮申候捨己從人ト申人無之門戸ノ見ニ泥ニ人  
ノ生死ヲ度外ニ置候片意地ナル愚物ノ多キハコマリ入  
候以上此昏簡ヨリ氣候ヨリ病源ヲ論シタルユハ采録ス  
ルトシカリ

塩谷子病源論(鈔)

大目舟山口丹波守ヨリ間部下總守殿被申渡候由ニテ  
向々エ達ス

此節流行ノ暴浮病ハ其療治方種々アル趣ニ候得共其中  
素人心得ヘキ法ヲ示ス預シメ是ヲ防ニハ都テ身ヲ冷ス  
トナク腹ニハ木綿ヲ巻大酒大食ヲ慎ミ其外コナレ難キ  
食物ヲ一切給申間舖候若此症催レ候ハ、早々寢床ニ入

リテ飲食ヲ慎ミ惣身ヲ温メ左ニ記ス芳香散ト云藥ヲ用  
ヘシ是ノミニシテ治スルモノサカラス且又吐瀉甚シク  
惣身冷ル程ニ至リシモノハ燒酎一二合ノ中ニ竜腦又ハ  
樟腦一二匁ヲイレ温ヲテ木綿ノ切ニ浸シ腹ヲ手足ニ靜  
ニスリコニ芥子泥ヲ心下腹ヲ手足ニ小半時位ツ、度々  
張ルヘシ

暴發吐瀉病療方集考

楊江客漢柳河瞰編 足

今年暮春の頃より雨多く四五月梅雨の候々いふもさら  
かに若くはお水無月も日夜降つてきて三伏の夏も甚  
ぶ暑うとも駄路所々川河ふも山崩れて故郷の便も間遠  
かりぬ。折々七月の末つりりり暴發の吐瀉病よ  
て死せる者少くも日本橋以南の所々最多く築地辺  
駁々深川本所も多く神田辺りも下谷浅草も頗多く赤坂  
青山辺も多し其外山手も属し多し高燥の地も稍少し八  
月上旬より中秋の頃まで最盛として毎日の死亡千を以  
て數ふべし今日に至るまで此病小覺し、暑を歴指せば  
殆ど千萬にも及ぶべき放然し、此病の危険なる事実小  
死生を反掌の間と判つ種々の療方ありと雖も其治を



者々恐く、僥倖の幸福あり、似たり故老の説を聞くと、  
此病世余年前京撰以西の諸国に流行して死者夥多あり  
しりぞも初めて行を止し時を秋九月より程なく寒氣  
洗節とありしは速に止むと云又十余年前東奥の海  
濱に行を止し事も有り上州野筋にも行を止し事も有りと  
云登時西国にても三日コロリと名け東国にても痧病と  
唱へしりともむ然も此病初めて今年小行を止し、小ハ  
非されども都下の人々従前の事を見聞せざる者多く医  
師も亦唯日常の急務の急を以て不虞の憂不應と術  
を講むるの暇なく局に當りて迷ふの患有るの抑此病  
突に十中の七八を斃すの危症ありと雖も詎勉精窮して  
救治の策を施さば竟に無誤此生路を閑く小至りさむ  
也故小吾今見聞する所の諸説を集録して以て當今施治

此考證を備へ且以て他年の戒とに  
此病の名従前一足せり俗に三日コロリと云ひ又唯コロ  
リとのこも稱をコロリを俗語して斃倒の謂なり漢字を  
以て虎狼痢かど書けるを回りに無稽也和蘭の医谷小亞  
細亞霍乱<sup>ア</sup>ア<sup>シ</sup>ア<sup>ク</sup>ア<sup>コ</sup>ア<sup>ン</sup>ア<sup>セ</sup>ア<sup>ブ</sup>東印度吐瀉病<sup>セ</sup>ア<sup>ラ</sup>ア<sup>ト</sup>ア<sup>ク</sup>ア<sup>コ</sup>ア<sup>シ</sup>  
冷徹疫<sup>ペ</sup>ア<sup>シ</sup>ア<sup>ク</sup>ア<sup>コ</sup>ア<sup>ン</sup>ア<sup>セ</sup>ア<sup>ブ</sup>東印度吐瀉病<sup>セ</sup>ア<sup>ラ</sup>ア<sup>ト</sup>ア<sup>ク</sup>ア<sup>コ</sup>ア<sup>シ</sup>  
同病を指し者ありコレを羅甸語して和蘭に胆液病<sup>カ</sup>  
ク<sup>ト</sup>と訳せしモルビエスビエ<sup>ル</sup>を黧黧と訳し彼地多くコ  
レを以て呼ぶ吾邦俗にコロリと唱ふる者と語意雲泥  
かると雖も声音相侶多し亦可笑しなり也此病を唐  
山人に霍傷痧と呼ぶかどいへるは例の浮説ニし取  
小足り唯此痧の字を用ひるは稍是に確當するに似多  
り痧病の考案常陸の原南陽が著せる医事小言にも見え

たれば参考す一抑痲字の爰の起る所を考ふるに南方  
炎熱の地沙磧太陽の光線射りて熱を事燒くが如  
く慣ざる者遽ふら、を經過れば夜間の冷氣觸して  
皮表の蒸氣孔忽ち悉く閉塞し暴卒に熱を發し或は吐瀉  
して死する者多し所謂南方瘴癘多しといへるも亦此類  
として伏波將軍の南征に歿せしも恐らく此病なるべし  
沙磧を踏て起る病かまはば瘴を加へる痲の字を製せしも  
亦故阿るりな然もども漢人奇怪を好むの癖ありして種  
々の妄説を設けて此病を毒虫の所為の如く云へる恰も  
市井の愚婦狐狸の憑多かるうんと疑へる小同し今其一  
を辨じ仲尼の春秋に有瘡と記せるを左氏の伝に注して  
瘡アリと記せるを災をかまはば凡物災をかきされは  
書と叙せるを仲尼の意を得て怪を語り小至らざる

者あり按て小周の代既小痲病の如き病ありて世俗小  
を之を瘡といて毒災の所為などいふ浮説有る質朴の  
代かまはば別小病名をも命ぜり事なく直小瘡を病の名と  
せしめしへし故小此病の偶々流行せしを有瘡と記され  
しあるべく左氏の災をかきされば書きと云へるも僅  
小三人五人此病に死し多しと記す小足りに數百千人  
に患あるが故小記せるといふ意あるを杜預が無益の注  
を贅して瘡を短狐沙を御して人の影を射ふかど俗間の  
妄説を放りしり天下の医家及本草者流皆此有名無実  
の短狐と云ふ虫を鬼の如く恐る、小至るも怪談の人を  
誤る皆此の如し此病の如き胆液沸騰し煩熱の爲小煎熬  
せしめて黒色稠厚の膏敗質とあり血も亦黒敗して水分  
と離る其稠厚なるが故小粘りて脈絡を流通せざり血流通

せざるが故に脈沉伏し遲緩或は結代し手足皮膚厥冷し  
血と離れたる水分の痊愈に因り咽と腸とより絞れ出さ  
る竟に生活の機関悉く止り全身猶塊の如く枯涸骨立て  
死するに斯く病の原因其理詳し推すべきを何ぞ婦如  
此蜜見ふ泥みて狐を制し鬼を驅るの方法を議するに違  
何らん冀とる有志の人左に抄録する諸家の説を参考し  
て務め俗間の惑を解し救済の良法を普く世に伝へ志  
のよ一人の命を救ふは百千の浮屠を作するより其功能浩  
大なり今日眼前死者麻の如く豈黙視するに忍びむや  
安政五年八月下浣  
江城僑客 某識

東印度吐浮病 オーストインゲセ 冷徹疫 コスタ 本邦所謂  
三日斃の説 記者不詳或云緒方洪葦のこと

省法 稀薄の粘水を吐浮し煩悶甚しく皮膚青色を發し  
声音嘶嘍し胃部小腹疼痛し足脚殊に腓腸とけし痛  
四肢腹部及舌共冷徹なる事大理石に如く小便閉  
止し脈細小沉伏指小た難く時々結代し終つて全く絶  
脈し皮膚全く張力を失ひ指を以て皮膚を摸り起せば手  
を以て其復故するに速且卒厥絶息す其経過甚く迅速  
なる事腺腫疫發黃疫の如く或發病十二時間死する者  
屢何れとも大抵二三日死するを常とす其死する者過  
二小  
至  
或は吐浮止むに随て神経熱小轉し日を経りて死するあり  
其治する者は大抵皆神経からび消食機の衰弱を殘る事

経日弥久なり

此病始々東印度の海濱及安<sup>グ</sup>日の河辺に生じ漸く轉遷し諸國に蔓延し終に全世界残す所なく大洋を越えて亞墨利加に布達せり但高燥の諸地之を免ぬ事多しと云ふ發黃疫及腺腫且此病人々相傳染す事ハ腺腫疫洵如く甚うらす

附腺腫疫

看法諸部残小腋下及鼠蹊の腺焮衝して初起より寒壞疽状を帯び遂に更此寒壞疽に變じ且之は魚に皮膚紫斑を發して血液皮下に汎濫し発病第一日より直に劇烈の熱を起し煩悶吐逆甚しく腦の病患を語昏冒等を魚に諸排泄物腐臭布て衰弱脱力の極に至る

發黃疫一名吐黑病

看法皮膚發黃して異物を吐下し煩悶脱力甚しく熱劇しく経過迅速しして死者其半に過く

此病は西印度の海濱に發し伝染し由て歐羅巴の諸地に汎濫すれども唯北 疫四十五度の地を限りて流行せしむ

